

## 学位論文題名

自らにとっての意味を確定していく家庭科での学び  
—かかわりの場の構成をめざして—

## 学位論文内容の要旨

本論文は、家庭科の授業において学習者がどのように教材と向き合い、また他の学習者と相互作用を展開しながら教材の理解と学習を形成しているかその微視的な過程を相互作用分析の手法を使って明らかにしたものである。学校教育としての家庭科教育は、日常生活（家庭生活）が学習の対象となっており、現実の家庭の中にある具体的なモノとの関わりを通してモノの意味や生活の在り方を問うという実践的な意味を伴った教科である。しかし、それ故に家庭で体験していることや学んでいることをわざわざ学校教育の中で学ぶ必要があるのかという家庭科教育の存在意義に関わる問題を抱えている教科でもある。あるいは、逆にそのために家庭科教育ではともすると、技術としての方法や抽象的な知識に還元された内容を教材として用いられる授業が少なからず見られるのが現状である。

本論文では、家庭科教育が本来的に目指すべきものと位置づけられている「実践的な能力の育成」は、学習者が対象を一般論としてではなく自らの生活に引き寄せて対象を捉えることで可能になると考える。そのためには、対象との身体的関わりも含めた意味の捉え直しの活動を積極的に授業の中に位置づけることと、学習者一人ひとりが生活の中の活動とその意味を当たり前として思い込んできたことを授業の中で他者と関わり、他者からの新たな視点と意味づけを知ることによって生活の見直しの機会を与えることが必要である。ここに学校教育としての家庭科教育の存在意義を持ち得ると考える。

本論文においては、家庭科での個々の学習者の学習と学習者間の相互作用による学習展開を捉えるための理論的枠組みとしてヴィゴツキーの教授・学習理論の可能性を検討した上で、実際のいくつかの家庭科の授業における学習者の学習過程を分析した。そこから、家庭科における学習の過程を分析・説明するためのモデルを構成し、それに基づいた授業構想とその方向性を提示することを目指した。本論文は序章と終章を含めて10章で構成されている。

第1章では、これまでの家庭科教育の現状について批判的検討を行い、問題の所在とその解決のための方途を論じた。この章では、これまでの主要な家庭科教育についての研究とその動向について、実際の授業の事例分析と授業構成案の内容分析を交えながら多くの家庭科教育の実践が学習者自らの生活課題を再考する内容になっていないことを明らかにした。これらの考察から家庭科教育の課題を析出し、本論文全体の研究課題を提示した。

第2章では、学習者が自らの生活についての理解を深めていくことを目指した家庭科教育における学習と理解過程を捉え、理論化していくための枠組みとしてヴィゴツキーの精神発達理論を位置づけ、その理論的説明の可能性を論じた。ここでは、特にヴィゴツキーが指摘した「即自—対他—対自」という三つの学習活動とその変容の過程に注目し、学習者が自らの生活経験を再認識し、また家庭科の授業における学習変化を説明出来る理論として位置づけ、この後の章で取り上げられている授業分析と解釈のための理論的枠組みを提示した。

第3章から第6章では、上記の理論的枠組みに基づいて複数の家庭科の授業実践の分析と解釈を行った。

第3章では、身近な食材の一つである玉ねぎに対する認識変化の過程を実際の調理体験と他の学習者との間の議論を通して明らかにした。これまでの家庭科教育の食生活の授業では、調和の取れた食事や栄養についての一般的な理解の形成が中心であったが、調理体験による食材との身体的関わりによって対象への実感的な理解を促す授業を創造することが出来ることをメルロ＝ポンティの身体論を援用しながら論じた。

第4章では、「靴下のたたみ方」の小学校の授業実践を分析した。「靴下」のたたみ方や収納の仕方は毎日の生活ではありふれたことで、取り立てて意識されることがないものである。だが、そこには各家庭や個人に特有の「たたみ方」の違いや、生活の便利さについての意識の違いが存在している。この「たたみ方」の違いにみる長所短所を授業の中で吟味し合うことで、衣生活と物が持っている意味、それらへの関わりを再認識する機会になることを明らかにした。

第5章では、衣生活の授業実践として、単衣長着（浴衣）の製作活動を取り上げた。ここでは、製作実習として技術指導とその一方的な受容が中心になりがちであったものに代わって、学習者の効果的な製作活動を支えていくような認知モデル（ミチチュアモデル）を提示することによって学習者の自主的、意欲的な製作活動を可能にすることを示した。製作という実践的な活動を支えるためにメンタルモデルが有効であることを明らかにしたが、この結果は家庭科教育に限らず広く教育実践に応用可能である。

第6章は、学習指導要領でも位置づけられている家庭生活と家族の問題を扱った授業の分析である。ここでは、これらの問題を一般的な知識レベルではなく、学習者自らにとって家族とは何であるか、あるいは自己と家族との関係をどう考えているのかという問いとして設定した。個々の学習者が家族の問題を問い直していくきっかけがグループ討論の中で生まれてくることを大学生と中学生を用いた授業の会話分析から明らかにした。特に、ここでは学習者自身の問い直しが自己内対話として起きており、さらにこの声を他者が相互に聞き合うことによって学習者間で相互影響が生じている事実注目した。これまでの授業の会話分析では注目されることのなかった自己内対話が「つぶやき」として外言化することで学習者の中でこれまでの自己の考えを見直していくいわば相互触発の場が生まれていることを明らかにした。

以上の授業実践の分析と理論的検討を受けて、第7章では、学習者自らの生活についての理解を深めていくことを可能にするものとしての家庭科の学びの全体像を示した。

第8章では、学習者の生活経験とその意味の捉え直しを促す家庭科の授業の構成と具体的な授業実践のあり方を提示し、さらに授業者と学習者の関係性についても検討を行った。

本論文の各章では学習者の学びの視点から家庭科を学ぶ意味について再検討を加えたが終章では、結論として、家庭科における教科としての独自の役割と意味を持ち得ることを述べた。

第3章から終章までは、具体的な授業実践の分析と授業構成のあり方について検討し、家庭科では、人間は具体的な生活経験に根ざしながら、道具やモノとの関わりを通して活動を展開し、その中から生活に結びついた学びをおこなっているという人間の本源的な学びが実現されていることを示した。そして、この本源的な学びを日常の生活経験という狭い範囲を超えて科学的知識とその視点から体験の意味を問い直すことが可能になっていることを主張した。ここに家庭科という教科の重要性とその役割があることを確認した。

本論文全体を通して、これまでの家庭科教育の研究では十分に検討されることがなかった学習者の学習対象やモノとの身体的関わりを通して学習が形成されていく過程や、他者との相互作用による相互影響過程による学習の見直しとその深化過程を詳細な授業過程分析によって明らかにした。

# 学位論文審査の要旨

主 査 特任教授 佐藤 公 治  
副 査 教 授 大 野 栄 三  
副 査 教 授 梅 津 徹 郎  
副 査 准教授 鈴 木 明 子 (広島大学教育学研究科)

## 学位論文題名

### 自らにとっての意味を確定していく家庭科での学び —かかわりの場の構成をめざして—

本論文は、家庭科の授業において学習者がどのように教材と向き合い、また他の学習者と相互作用を展開しながら教材の理解と学習を形成しているかその微視的な過程を明らかにしたものである。家庭科教育は日常の生活（家庭生活）が学習の対象で、現実の家庭の中にある具体的なモノとの関わりを通して、モノの意味や生活の在り方を問うという実践的な意味を伴った教科である。だが、それ故に家庭で体験していることや学んでいることをわざわざ学校教育の中で学ぶ必要があるのかという家庭科教育の存在意義に関わる問題を抱えている教科でもある。あるいは、家庭科教育ではともすると、技術としての方法や抽象的な知識に還元されてしまう授業が少なからず見られるのが現状である。

著者は、家庭科教育が本来的に目指すべきものと位置づけられている「実践的な能力の育成」は、学習者が自らの生活に引き寄せて対象を捉えることで可能になると考える。そのためには、対象との身体的関わりも含めた意味の捉え直しの活動を積極的に授業の中に位置づけることと、学習者一人ひとりが授業の中で他者と関わり、所与の家庭生活を見直し、他者からの新たな視点と意味づけを得ることのできる機会を設けなくてはならない。著者はここに学校教育としての家庭科教育の存在意義を持ち得ると主張する。

本論文では、家庭科での個々の学習者の学習過程と学習者間の相互作用による学習展開の過程を捉えるための理論的枠組みとしてヴィゴツキーの教授・学習理論の可能性を検討した上で、いくつかの家庭科の授業における学習者の学習過程を分析し、理論化を行った。

第1章では、これまでの家庭科教育では、学習者自らの生活課題を再考する内容になっていないという批判的考察を行い、問題の所在とその解決のための方途を論じ、本論文の研究課題を明確にしている。第2章では、家庭科教育に特化した学習過程を理論化していく枠組みとしてヴィゴツキーの精神発達理論の中でも即自—対他—対自という3段階の学習過程を位置づけ、その理論的説明の可能性を論じ、この後の章の授業分析と解釈のための理論的枠組みを提示している。

第3章から第6章では、上記の理論的枠組みに基づいて複数の家庭科の授業実践の分析

と解釈を行っている。第3章では、身近な食材の一つである玉ねぎに対する認識変化の過程を調理体験と他の学習者との間の議論から明らかにしている。これまでの家庭科教育の食生活の授業では、食事や栄養についての一般的な理解の形成が中心であったが、調理体験による食材との身体的関わりを通して対象理解を可能にする授業の創造をメルロ＝ポンティの身体論を援用しながら論じている。第5章では衣生活の授業実践として、単衣長着（浴衣）の製作活動を取り上げているが、従来は製作実習の中では技術指導とその一方的な受容が中心になりがちであった授業に代わって、学習者の効果的な製作活動を支えていく認知モデル（ミチチュアモデル）を利用することによって学習者の自主的、意欲的な製作活動が可能になることを示した。ここで製作という実践的な活動を支えるための認知モデルの効用を明らかにして、広く教育実践に応用可能な知見を提供している。第6章では、家庭生活と家族の問題を一般的な知識レベルではなく、学習者自らにとって家族とは何であるか、あるいは自己と家族との関係をどう考えているのか、その問い直しがグループ討論の中で生まれていることを授業の詳細な会話分析によって明らかにしている。特に、ここでは学習者自身の問い直しの活動としての自己内対話に注目し、さらにこの声を相互に他者が聞き合うことで学習者の相互影響が生じていることを見出している。これまでの授業の会話分析では注目されることのなかった自己内対話を「つぶやき」という外言化とその相互影響過程として扱っており、分析の新しい視点を提示している。

以上の授業実践の分析と理論的検討を受けて、第7章では、学習者自らの生活についての理解を深めていくことを可能にするものとしての家庭科の学びの全体像を示した。第8章では、学習者の生活経験とその意味の捉え直しを促す家庭科の授業の構成と授業実践のあり方を具体的に提示している。終章では、家庭科における教科としての独自の役割と意味を持ち得ることを述べている。

第3章から終章までの具体的な授業実践の分析と授業構成のあり方についての検討を通して、著者は家庭科という授業では、具体的な生活経験に根ざしながら道具やモノとの関わりを通じた活動を展開し、その中から生活に結びついた学びをおこなっているという人間の本源的な学びが実現されていること、そして、この本源的学びが日常の生活経験という狭い範囲を超えて多様な視点から見直され、科学的知識として意味が問い直されていることに家庭科という教科の重要性とその位置づけがあることを明確にした。この点が本論文の大きな学問的貢献である。

残された課題としては、学習者の理解モデルがどこまで妥当性を持ち得るのか、さらに他の授業実践で検証することや、相互作用過程の分析と表現方法についての改善が望まれる。また、研究として取り上げられた授業の達成目標と評価についての検討が十分ではないといった課題が上げられる。

本論文は、家庭科教育の研究として必ずしも十分に検討されることがなかった学習者の学習対象やモノとの身体的関わりを通して学習が形成されていく過程や、他者との相互作用による相互影響過程による学習の見直しとその深化過程を詳細な授業過程分析から明らかにした点で、新しい家庭科教育とその研究の方向性を示しており高く評価できる。本論文の研究成果は、今日の家庭科教育の進展に大きく寄与する点で重要な意味を持っている。

よって著者は、北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。